

道徳教育における「ゆさぶり」とは何か

学籍番号 199343

氏名 藤井隆人

主指導教員 金光靖樹先生

1. 研究目的と背景

教育界において「ゆさぶり」は広く浸透している言葉であり、「子どもたちの意見を引き出すためには『ゆさぶり』が重要だ」などと用いられる。しかし、「ゆさぶり」という言葉が使われる場面を注視すると、その実態や意義については明確にされないまま、「ゆさぶり」の重要性だけは自明視されたものとして使われることが多い。

その原因は「ゆさぶり」という言葉が直感的に理解できてしまうところにある。日常的には、相手を動揺させて情報を聞き出すときや、映画のラストシーンに対する感動を描写するときに用いられ、そこでの「揺さぶり」や「心を揺さぶる」という表現は、心の「揺れ動き」を見事に表現している。この日常的に用いる「揺さぶり」の理解があることで、教育における「ゆさぶり」も、子どもたちの心や考えを「ゆさぶり」、自分の考えを深めてもらうきっかけとして重要なのだと直感的に理解出来る。

しかし、教育で用いられる「ゆさぶり」が日常的に用いる「揺さぶり」と同じように捉えられてはならない。なぜなら教育における「ゆさぶり」は子どもたちを不安にさせたり動揺させたりすることが目的なのではなく、ねらいは「ゆさぶった」後の状態にあるからだ。

本研究の目的は、従来その実態や意義が曖昧なまま用いられてきた「ゆさぶり」に理論的基盤を与え、授業実践の観点からも論じることで、道徳教育において「ゆさぶり」が子どもたちの道徳性の発達に寄与することを示すことにある。

2. 「ゆさぶり」とは何か

本論文の第1章ではイズラエル・シェフラーの知識論をもとに「ゆさぶり」を考察する。シェフラーは知識には「弱い意味での知識（弱い知識）」と「強い意味での知識（強い知識）」の二種類があると言う。「弱い知識」だと、「当たり前」や単に真であると信じているだけであるが、「強い知識」だとそこに自分なりに説得力のある説明が出来る能力や実際に行動に移すことが出来る能力などが加わる。

このシェフラーの知識論をもとに、「ゆさぶる」対象は子どもたちが既に持っている「弱い知識」であり、この「弱い知識」では解決できない（矛盾が生じるような）「例

外」に衝突させ、認知の不均衡状態を意図的にひき起こすことを「ゆさぶり」だと考えた。

そこで第2章では「ゆさぶり」を「葛藤」、「気付きや発見」、「感動」の三つの側面から心理学的に分析することを試みた。「葛藤」における「ゆさぶり」ではローレンス・コールバーグの発達理論を参照した。この発達理論は、モラルジレンマと呼ばれる複数の価値が衝突し、ひとつの価値を優先してしまうと矛盾が生じてしまうような問題に直面することで、もとの認知構造が不均衡状態になり、この矛盾を解消するための均衡化の働きによって発達が促されると考える。ここでの不均衡状態はまさに「ゆさぶられた」後の子どもの認知の状態であり、「ゆさぶり」の目的である「弱い知識」から「強い知識」への移行をこの理論から説明できると主張する。また「気付きや発見」では「強い知識」への移行を阻害していた要因に気付くための「ゆさぶり」として、「感動」では「弱い知識」に実感を肉付けすることで自分のなかでの重要性が増すといった意味での「強い知識」への移行を促すものとして「ゆさぶり」を論じている。

また第2章の後半では、「弱い知識」と「強い知識」の再解釈を行い、たとえ「強い知識」と呼びうるようなコールバーグの発達理論でいうところの脱慣習的な思考も、経験の習熟により発生確率が高まったものとして扱う。この再解釈をふまえて、道德の授業では子どもたちが日常の生活で用いることが少ない脱慣習的な思考が必要となる経験の場として機能すべきだと主張する。

3. 実践課題実習での研究授業について

第3章では発展課題実習で実施した「ゆさぶり」に焦点化した研究授業のねらいや授業構成の工夫を述べ、その後授業分析を行った。

対象は小学校六年生であり、教材は「規則の尊重」に関わる『団地と子犬』を用いて授業を行った。本授業のねらいは子どもたちの「弱い知識」としての規則概念を「ゆさぶり」、「強い知識」への移行を促すことだ。「ゆさぶり」をひき起こす「仕掛け」として、中心発問では物語とは異なる事例を子どもたちに想像してつくってもらい、挙がった「事例」が規則の「例外」として認められるかどうかを全体で話し合う活動を設けた。

授業後に回収したワークシートのループリック評価を行い、児童が規則をどのように考えるようになったのか分析した。結果、授業のねらいとしていたコールバーグの発達理論でいうところの第五段階的な規則概念の理解に達していた児童は少数であったが、第五段階への発達の準備段階に差し掛かっていると思われる記述や、規則の他律的理解を脱しつつある記述も見られた。

本研究では「感動」の「ゆさぶり」に焦点化した授業の構想については十分に扱えず、これからの課題として残るが、「ゆさぶり」に焦点化した授業の一例を理論と実践の両方から示すことが出来たと考えている。